

スタジオ夜話

第80話 スタジオ夜話

「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅲ

キングレコードの取り組み

☆ はじめに

いよいよ今年も12月にはいりました。今年には台風災害など異常気象により全国で大変な被害となりました。未だに復旧のめどが立たない自治体も多く、この冬に向かい被害に遭われた皆様には一日も早く日常を取り戻せるようにお祈り申し上げます。さて今回のスタジオ夜話、前号で予告「いまさらですがレコードを楽しむ Ⅲ」キングレコードの取り組みの取材報告です。アナログレコードの売り上げが回復している現状を、取材をもとに探してみたいと思います。お付き合いよろしくお願いたします。

☆ 「アナログレコードへの取り組み」 キングレコード関口台スタジオ

「音」という題材を基本に毎回本誌にスタジオ夜話を連載していることから今回は、欧米をはじめ日本でも売上がV字回復？しているアナログレコード復活に着目してみました。筆者の知り合いでプロオーディオの匠、スタジオシステムエンジニアの原正和氏にキングレコードの取り組みの話聞きご紹介いただきました。アナログレコード復活その取り組みをご紹介します。筆者がキングレコード関口台スタジオを訪れたのはまだ夏の盛り8月末のことです。取材にご対応していただいたのは今回のアナログレコード復活を企画提案された「管理統括部長・高橋邦明氏」とカッティングをご担当する「マスタリングエンジニア・上田佳子氏」です。両氏はキングレコードがデジタルハイレゾ時代でのアナログレコード出版事業に参入するにあたり様々な取り組みを行ってきたのでご紹介いたします。

☆ 「そもそもアナログレコード復活？その動機は？」

統括部長の高橋氏はアナログレコード撤退時期の1991年の頃を思い出しながら次のように語ってくれました。

歴史です！当時キングレコードではカッティングにスカリー1台とノイマンを4台所有していたそうです。現講談社社屋、音羽のスタジオにはV MS66とV MS70の2台、残りは旧埼玉工場にありました。

音質の良さで有名だったA&MレーベルのアルバムはノイマンのV MS66シリーズで実現したスーパーダイナミックサウンドのアルバムでした。今回復活するのは当時の最新鋭カッティングマシン、ノイマンのV MS70です。

1995年に荒川区にある倉庫に移動保管していたものです。本体は保管のためバラバラに分解され嚴重に封をされて梱包。

一方V MS66は学術展示のため日本工学院八王子専門学校に寄贈されました。高橋氏は近年アナログレコードが見直され評価が上がりはじめたことをきっかけに、あきらめきれずにいたアナログレコードを復活させる事業を計画、今回の運びとなりました。あわせて都合よく寄贈したV MS66も学内で展示されずにいることがわかり、勝手ではありましたがご返却いただくことになりました。と笑いながら語ってくれました。ばらばらのV MS70は開封すると埃ひとつなく今にも動きそうな気配を漂わせていました。駆動するAMP類も倉庫大搜索の結果発見！本格的に復活への道を歩み始めました。

キングレコードにはかつてのアナログ時代の遺産、マスターテープは2万本以上

も残っていてカッティングマシンと組み合わせるテープレコーダーもテレフンケンM15A、ハーフィンチSTUDER-A 80などが現役で稼働しているようです。

今後に期待が持てます。またV MS66もカッティングルームで復活待ちの状態です。V MS70は完璧、それ以上の復活です。

28年ぶりにアナログレコードカッティングが本格的に稼働します。

☆カッティングを担う「確かな耳」 マスタリングエンジニア・上田佳子氏

最近のアナログレコード復活の背景には様々な要因はあるものの、個性豊かな音創りに期待を寄せている人々がいる現実、またアナログ的なアイテムなどのファッション性も無視はできません。と音そのものの重要性に重心は置きながらも様々な角度からの展開を視野に入れているようでした。上田氏はその時のインタビューの中でSTUDER社のCDプレーヤーA730の音質に触れたとき、当時のマスタリングPCMプロセッサ1630のアナログアウトの音質と同環境で聞いた時のA730の音が非常によく似ていると評していました。

まさに「違いがわかるプロフェッショナルな感覚の持ち主」です。また話の中で筆者が前号で触れた、スペックに頼るだけでは良い音にはならず、経験とそれに裏打ちされた勘が良い音を創ると、訳のわからない話にも丁寧にお付き合いしてくださいました。

またアナログマスターのCD、デジタルマスターのアナログレコードもこうご期待です。上田氏の確かな耳と経験と勘？そして研究を重ね磨かれたカッティング技術が

スタジオ夜話 参考資料

新たなアナログレコードを誕生させます。

☆キングレコードの戦略は？

今回お邪魔した関口台スタジオは 4 つのスタジオと 4 つのマスタリング室を持つキングレコードの中心的スタジオです。今回のカッティングルームはこうした環境に新たに追加された極めて戦略的設備です。

各スタジオ調整室には最新鋭のスタジオ機器をはじめアーカイブなどには欠かせないアナログ機器もあり、アナログマスターからデジタルマスター、デジタルファイルソースなど何でもありというものです。

併せて 1St は 40 人以上のオーケストラの収録も可能なスタジオです。勿論各スタジオからのダイレクトカッティングが可能です。この規模でのダイレクトカッティングが可能なスタジオはキングレコードの関口台スタジオとアビーロードスタジオぐらいと思われます。

☆次回は

キングレコード取材報告第 2 回目です。よりくわしくまたアナログレコードカッティングについてもお話します。カッティングレース やカッターヘッド、カッティングアンプなどの詳しいお話は次回にご期待ください。

日一日と寒さが増していきます。読者皆様もお身体を大切にお過ごし下さい。



今回復活したノイマンのカッティングレース VMS-70 驚くほど綺麗に仕上がっていました。 駆動モーターなどの詳細は次号で詳しく解説します。

キングレコードオリジナルのカッティングアンプ、東芝 6GB8 パラレルプッシュで約 300W の出力を確保している。トランスはラックス特注。キングオリジナル SAL74B ☆ノイマンオリジナルはテレフンケンの EL156 パラプッシュで 200W SX68 に欧米では使用していました。



本文中、上田氏が話題にした SONY PCM プロセッサー 1630 左と STUDER の CD プレーヤー A730



カッターヘッドです。ノイマン SX74 今回お世話になった管理統括部長の高橋邦明氏とエンジニアの上田佳子氏 ケースの中に大切に保管されています。

— 森田 雅行 —